

---

# 比例 × 反比例 ~ 格子点 ~

Sakura愛姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

比例×反比例〜格子点〜

### 【Nコード】

N1247E

### 【作者名】

Sakura愛姫

### 【あらすじ】

（事情により、IDとペンネームを変えて再投稿しています。申し訳ございません。）彼に対しては最初、子供を想う母親のような気持ちを向けていた。だけどそれは、日数が増えるごとに変化を留まらせなくて、加速度だけを増すばかり。日数と比例して、気持ちとは反比例して。

## 第1話〜二従兄妹〜（前書き）

これは、「比例×反比例」の著作者、佐倉愛姫と同一人物である私が再投稿した小説です。

今回、IDとパスワードを私のミスで失くしてしまい、このような事態となつてしまいました。

不快に思われた方、申し訳ございません。

## 第1話〜二従兄妹〜

町外れの広大な土地に、ひっそり静かに聳え立つ西洋風の大豪邸。  
今にもエリザベス女王やクレオパトラ、ダイアナ妃などリッチな美人偉人女性が出てきそうな、神楽邸。

そんな神楽邸の朝は・・・ひとつの罵声によって始まるのである。

「大輝いつ！起きろおっ！」

躊躇なく少女は、同年代の少年のドアをバンツと開ける。

「うつせえなあ美輝・・・まだ5時じゃん・・・」

その少年・・・もとい神楽大輝カケラヒロキは、上半身裸のままムクツと起き上がって胡坐をかいて頭をガシガシ掻く。

「5時6時7時関係なあいつ！アンタ男でしょっ！？早起きしなくちゃっ！だらしないっ！」

まるで寝坊ばかりする子供の世話を焼く母親のように、少女・・・  
神楽美輝カケラミキは、胡坐をかいている大輝を腰に手を当てて見下ろす。

大輝を睨みつける美輝の目。「なんだよ。」とでも言いそうな大輝の目。

互いの視線が絡み合うこと、数秒・・・

「・・・あと1時間・・・」

美輝の目力・・・もとい迫力(?)に観念した大輝は、掛け布団もかけずにパタンと寝転んだ。

「・・・また寝たい・・・」

美輝は、大輝の頬をペチペチ叩いたり、抓ったりするが・・・大輝は、唸り声を上げるだけで、ちつとも起きる気配がしない。

・・・こんな時“だけ”、大阪のおばちゃんはよの「早起きいっ！」パワーが欲しい・・・  
そう思った美輝であった。

でも、時間は大輝が早く起きるも遅く起きるも関わらず、著しく過ぎるだけで・・・

「・・・もう7時半だしっ！」

化粧に髪に念を入れていた美輝は、すっかり時間も忘れていたようで。気づけば、もう家を出る時間帯になっていたのだった。

慌てて美輝は、階段をドタドタ音を立てて下りる。

「大輝っ！面談行かないんなら洗濯モン入れといてっ！あと布団も干してよっ！お昼は冷凍庫にあるもんレンジで温めてっ！あと500Wでっ！」

ローファーに足を入れながら、美輝は大輝にどしどし事を申し付ける。

大輝は「へいへい。」と受け流す様に聞いていた。

「じゃあ行つてきますっ！」

「・・・行つたっしやい。」

美輝が残したドアの余韻が消えた頃・・・ソファでゴロゴロしてた大輝は、途轍もなく大きなため息を吐いた。

「・・・つまんねえ。」

まるで、何か“楽しみ”を失ったかのような表情で・・・

大輝が通う高校は通信制。「1カ月に1回の担任との面談でいい」という大輝の学校生活は、途轍もなく暇でつまらないものだった。通信制にした理由はただひとつ。「女がキャーキャーウルサイからだそうだ。中学時代、大輝が廊下を通れば学年問わずの女子が騒ぎ、体育の時間で汗を服で拭うだけでも女子は大騒ぎ。よほどその動作が色っぽく見えるのだろう。仕舞いには、部活・・・サッカー部でシユートを決めただけでも女子が凄く騒ぐ・・・女に嫌気が差すのも、頷けるであろう。だから、高校では通信制にしたわけだ。

家にいて、「つまらない」と思うのは、通信制のこともあるだろう。部活はできないし、クラスメイトと顔を合わせることもない。遊び盛りな17歳という年頃には、堪えきれないぐらい素晴らしいつまらない条件盛りだくさんだ。少々人と間を置いてしまおう大輝にも・・・それは感じられた。

・・・だが。理由は、もうひとつある。

今現在欠けているもの・・・それは、女子の甲高い悲鳴に近い声よりも少し・・・本当に微かに落ち着いている声。忙しい行動せわと言動。大輝にとって、どこか「安心」できる人。

“美輝”だった。

「・・・布団でも干すか。暇だし。」

美輝がいない、静かな空気が流れる空間・・・少年はダルい体を起こし、布団を取ろうと美輝の部屋へ向かった。

一方、既に学校に着いた美輝は・・・

「もう、ありえなくないっ!?!」

早速、友達の篠原恵夢シノハラメグムに低血圧で寝起きが悪い少年のことについて愚痴ってた。

次々とマシンガンのように言葉を発する美輝の発言を、茶髪のサラサラストレートの髪でナチュラルメイクを施した恵夢は「はいはい。」と笑顔で受け流している。

「恵夢ん家の舜理君シュンリ、言うこと聞くんでしょおっ!?!羨まし〜っ!舜理君が弟だったらよかったのに〜っ!」

「ダメ。舜理はやんない。ウチの可愛い弟なんだから。」

先に言っておくが、恵夢はかなりのブラコンだ。

「っーか、大輝君って・・・弟じゃないことない?」

・・・真剣な表情で恵夢はそう言う。

美輝の表情が、一瞬にして固まった。

「・・・弟もなんも・・・二フタ従姉弟イトコだもん。」

「いや、二ニ従兄妹イトコなんじゃない?」

「・・・まあ大輝の方が誕生日早いけどさ。」

大輝と美輝は、二ニ従兄妹。大輝は、美輝の父の従兄弟イトコの孫だ。

大輝の両親・・・つまりは美輝の父の従兄弟の子供は、数年前で両方とも事故で他界。美輝の父が、率先して大輝を神楽家に引き取った。(膨大な敷地と実力を維持する神楽家の大輝の引き取りは、親戚からも賛成意見が多数出た。)

・・・この時美輝は7歳3カ月。大輝は7歳5カ月だった。

「二従従兄妹でも・・・よく大輝君、発情しないよねえ・・・」

「? 恵夢、何か言った??」

美輝は、視力がずっとAなのに対し、聴力は途轍もなく悪い。・・・とのことを熟知していた恵夢は・・・

「・・・何でもない。」

意味深な笑みを浮かべて、そう答えた。

「変な恵夢うっ！それよりさっ！藍住高校の三浦君マジでカッコよくないっ!？」

「はいはい。そおですねえ」

根掘り葉掘り聞く性分ではない美輝は、早速今度は他校(といっても大輝が通う通信制アリの高校だが)の男子のことについてのマシンガントークに切り替えた。

なんせ、ここは私立華椿女子高等学院。即ち女子高。今でもクラス内のあちらこちらで男子話ダンバナに花を咲かせているのであった。

表面上で、美輝は例の三浦君についてのマシンガントークをしているのだが・・・心中では、“二従兄妹”についてかなり気にしていた。

二 従兄妹同士で暮らすのって・・・ヤバいことなのか？

そして美輝は、『ヤバいんじゃない？』と世間で持て囃はされていることを例に挙げて考えてみる。

・・・そうであれ、そうでなかれ・・・やっぱり、答えはひとつしか出てこなかった。

その答えは・・・子供を想う、母親のようなもので。

## 第1話〜二従兄妹〜（後書き）

『比例×反比例』裏コント〜二従兄妹って!??』

作者「初めまして。作者の佐倉愛姫です。」

美輝「初めまして〜っ!美輝で〜っす ヨロピクウ〜!」

作者「うわうつせえ・・・元気だねえアンタ。」

美輝「こんぐらいが普通だよ 現中2ジミーズのアンタには分からないだろうけど」

作者「・・・(怒)アンタ、最初はクールキャラってイメージにとったのに・・・なんでそーなったんだよ?」

美輝「成り行き上かなあ?つか、書いたのアンタじゃん」

作者「・・・そりゃそーだね。(渋々)っーか、二従兄妹ってそもそもなんだよ?」

美輝「ん〜?本人から見て傍系6親等の親族だつてよお。」

作者「?だつたらさ、アンタの父親から見て大輝が二従兄弟ってコトもあつたりすんじゃない?」

美輝「・・・」

二従兄妹とは、謎です・・・( ; )二従兄妹について知ることができることがある方っ!是非教えてください。

・・・とまあ、こんな作者ですが、どうか見捨てないでやってください。m(ー)ー)m

P.S.この度は誠に申し訳ございませんでした

## 第2話「タメイキ」(前書き)

「あらすじ」

自分の子供のように二従兄妹の大輝<sup>ヒロキ</sup>を想う美輝<sup>ミキ</sup>。

だが、大輝は美輝とは全く別の感情を募らせていたのだった・・・

## 第2話くタメイキ

一方、布団を取りに美輝の部屋に行った大輝は。

「・・・何だコレ。」

ある1枚の写真を見つけた。

幸せそうに笑う美輝の姿と・・・同じく、笑顔の自分が知らない男茶髪の、サラサラした髪に、美輝よりずっと高い身長。（大輝よりは劣るけど）整った顔立ち・・・

それらは全て、大輝が全く知らないものだった。

その全く知らない人物と、美輝が幸せな笑みを浮かべている・・・大輝は、妙に苛立った。

それは　独占欲、情けなさ、悔しさ・・・決してよくない感情が渦巻いている、どす黒い苛立ちだった。

「・・・ま、いつか。」

美輝と同様、根掘り葉掘り探ったりする性分ではない大輝は、そつとその写真を元あった場所に戻した。

だけど・・・まだ、苛立ちは絶頂に位置している。

何故かは・・・今まで、自分が見てきた中でいちばんの美輝の笑顔だったから。

『その笑顔を、自分に向けてくれない。』・・・変わることがない現状。充分熟知していたはずが・・・余計、そのどす黒い苛立ちが渦巻き模様をどんどん増やしていく。

渦巻きは、苛立ちに比例して増え・・・熟知していたはずの現状に反比例する。

+ - + - + - + - + -

不可解なグラフに少年が悶々（モンモン）と悩んでいる頃。

「あ、コレって美輝のママじゃないっ!?!」

恵夢が、美輝に向かってケータイをズバツと出す。

「・・・え?」

美輝は、引き気味で疑問符付きで聞き返す。

「コレっ! アンタのママの神楽麗沙様じゃんっ! 明日ニューヨーク発売するんだってえっ! 随分前から知ってたけど・・・美輝っ! 絶対明日CD屋行こおねっ! ねっ!?!」

「は、はい・・・」

引くのも当然。いつもクールキャラの恵夢がこんなに騒いでいるのだ。

騒ぎの原因は、カケラレイサ神楽麗沙。40歳にして、18歳のような容姿を持つ・・・それが決め手となって、今大ブレイク中のモデルを本業としたタレント、司会、女優、歌手、ダンサー・・・俗にいうマルチタレント。

そして、美輝の母親でもある。

「てゆうかさっ! あの神楽翔一郎様もお正月とかには帰って来るんでしょっ!?! 麗沙様との結婚騒動の張本人っ!」

「・・・恵夢、そのレッテル古いつてえ・・・」

美輝の母は、当時IT企業の若社長の神楽翔一郎カケラシヨウイチロウと17年前に結婚した。

・・・よって、恵夢の発言は大のジダオなのである。

「いーなあっ！新年早々2人の有名人がああ豪邸に集うなんてっ！」

もうすっかり興奮状態の恵夢に、美輝は苦笑した。

・・・「2人の有名人」という“レッテル”について　　心の中で溜息を吐いた。

でも、本当に心の中から溜息が出るのは、バイトの時間。授業時間は著しく過ぎ、放課後になった。

金銭的に、とても・・・いや、ギザ、ギガント、ギガンティック・・・もといビックバン裕福な神楽家は、バイトなどは無用の長物だった。

そんな神楽家の娘の美輝がバイトをする理由はただひとつ。「HHK（暇で暇で困っちゃう）」だからだそうだ。

面接の時、このHHKを語源ナシで店長に言った美輝も、かなりの度胸者である。（こんな美輝を引き取った店長もかなりのものだが・・・）

さて、場所はあるひとつの洋風な建物の前に移りまして。

「いんちにわっっ！」

美輝は裏口関係ナシに、普通の客用の表口から入ってくる。

「あ、美輝ちゃんっ！」

「「こんにちはわ〜」じゃなくて、「こんにちは〜」でしょ??」

店内には、ツツコみどころが見事にズレている男女計10名が和気藹々と働いていた。

「コラ。美輝。そこは客用入口。即ち表口。店員は裏口だろ？」

1人、ツツコみどころがバツチり合っている少年が美輝の頭を軽く小突く。

小突かれたところを摩りながら、美輝は

「はあいつ！拓海先輩っ！」

敬礼のポーズをして、笑顔をつくった。

心の中で、溜息を吐きながら。

この少年は、18歳ながらも家業である洋風料理を継いだ少年……  
ハヤヒタクミ  
早瀬拓海だ。

美輝が最も苦手とする……“彼氏”。

大輝の頭の中でグルグル回っている写真の……茶髪の少年  
だった。

美輝が、拓海と付き合い始めたのは……美輝が店員になってから  
数日後のことだった。

美輝と拓海が初めて顔を合わせたのは、面接時。

「神楽美輝さんですね？」

「はいっ！高校2年生ですっ！」

「・・・ここは高校生は雇わないのだが？」

「はいっ！知ってますっ」

能天気になぞ答える現高2の美輝を、拓海は疑わしい目で見つめた。その目には、「何故それを知っていて受けてるんだ？」という疑問が隠されてある。

「だって私、H H Kですもんっ！」

「・・・は？」

いきなりのアルファベット3文字の登場に、拓海は思わずズッコケそうになる。

瞬時に思い浮かんだH H Kの語源は、「H（風船）H（膨らんで）K（壊れちゃう）」だそうだ。何故風船なのかは、多分拓海の弟がまだ幼稚園児だからなのだろう。

「・・・まあいいだろう。ただし・・・ひとつ定めがある。」

「何ですか？」

拓海は、ニコツと微笑んで・・・思い描けない一言をサラリと言った。

「俺と付き合っつて定め。」

もう、本当にサラリと。

一瞬、美輝の表情が固まった。

「・・・店長・・・いや、もとい拓海先輩。なんでですか？」

歳もひとつだけ上ということもあり、あえて美輝は先輩という用語を取り出し、“拓海”の後に引つ付けた。

「ああ。一目惚れっつーの？美輝ちゃんに。」

髪をクシャツと掻きあげ、履歴書をパサツと置き拓海はふわりと笑う。

客観的に見ると、「色っぽい」以外何も言えない動作だが・・・美輝には、「キヤラ違えっ！」としか考えようがないほど、容姿に見惚れる余裕もないほどパニクっていた。

「いや、私、男の子と付き合っただことないし・・・」

「・・・関係ねえよ。そんなコト。ちゃんとリードするから。ヨロシク。」

拓海は美輝の有無も聞かず・・・唇にそっとキスした。

「・・・え？」

初めてで、しかもいきなりで短いキスに、実感する余裕もなかった美輝は、顔が離された後、素っ頓狂な呟きを出した。

「・・・俺さ。自分が欲しいモノって・・・手に入れる手段考えられない性質タチなんだよね。」

舌をペロツと出して、拓海は笑顔をつくった。

「じゃ、これ“美輝”のタイムカード。」

「え？はい？」

「明日から。ヨロシクね。“色々”と。」

最後にフツと微笑み、拓海は部屋を後にした。

・・・まるでマンガのような展開の早さに、付いていけなかった美輝は・・・その場にペタリと座り込んだ。

ハッキリしていることは・・・「ココを選ぶんじゃないかった。」という・・・取り返しがつかない、後悔。  
拓海の裏表。それと・・・

最悪のファーストキス。

「・・・ハア。」

誰もいない場所で、美輝は溜息を吐いた。

もう、限界かも・・・バイト・・・

彩り鮮やかな数本のステンドグラスを眺めながら、自分の限界さえも予知していた。

「どうしたの？元氣ないね。溜息なんてらしくねーぞお？」

そんな美輝の隣に、ある1人の綺麗な女性が座る。

「・・・篠原先輩っ！いや、なんでもありませんよっ！やーですねえっ！溜息なんかあっ！」

シノハラメグミ  
篠原恵美。 恵夢の姉だ。

美輝が信頼できるバイトの先輩。色々な冗談話を笑顔で受け入れてくれる、恵夢とは少し対照的な温厚な性格の美人。

「そう？なんかあったら言ってよね？必ず乗るからねっ！」  
「……ありがとうございます！」

打ち明けられたら、どれだけラクなのだろう。

美輝は、そう考えたが……打ち明けることは、できなかった。

……人に対して甘えたくない。頼りにしたくない。

たとえそれが、恵美であれ……美輝は、その考えを崩さなかった。  
その考えが、美輝の「何があっても表ではめげる表情を出さない」という前向きな性格に繋がっているのも、相違ない。

そして今日も、表では「明るいいい店員」を演じて、裏で「拓海との関係」に悩んでいる美輝。

何回目か分からない、美輝の溜息が春風に溶け込み……悩みだけを残して儂くも、消えていった。

## 第2話〈タメイキ〉（後書き）

『比例×反比例』裏コント〜R15の謎〜

作者「さてさて、今日はこの小説・・・自称R15（15歳以下観覧禁止）の分類を指定している謎について迫ります。」

大輝「・・・もう謎は自分で分かってるクセに。意味ねーんじゃん。」

作者「・・・そんなシケたこと言うなよ。」

大輝「つーか第一に、なんで俺がココに登場せなきゃなんねえんだ？」

作者「それはだね・・・R15にするような行動を取るような人物は誰だと思ukai？」

大輝「・・・あの茶髪のチャラそうで変態そうな野郎じゃねーの？」

（拓海のことです。）

作者「いえいえいえ・・・不覚だろーけどね・・・」

大輝「なんで俺が不覚しなきゃなんねーんだよ。」

作者「・・・やっぱ教えんところっ！ネタバレするかもだし！」

大輝「・・・ワケ分かんねえ。ま、いつか。」

R15の真相は、8〜10話以降明らかになります。

・・・どうでもいいなんて言わないで下さいよ？（^ ^ ;）

### 第3話 心の拠所

「私の妹の親友の子、相当いい子らしいよ。妹が言ってた。」

それは、1カ月前のバイトの日。店員であり、クラスメイトの篠原恵美が、思い出したように早瀬拓海そう言った。言われた途端、拓海の頭の中は疑問符で埋め尽くされる。

「……なんで今、俺に関係ある？学校で話せばいいじゃないか。」  
「だって学校、ケータイ持込禁止だし。」

そう言いながら、ケータイを弄る恵美。

恵美と拓海が通う国立麗宮高等学校は、途轍もなく規則が堅い。ケータイ使用禁止、スカートは膝下、髪は肩にかかる場合は結ぶなど、田舎の中学校みたいな規則ばかりだ。（髪を染めている拓海は、生徒指導の先生に（無論）指摘されると「地毛」と言い張っている）

「この子だよ。彼女候補にどう？早瀬君。」

恵美は、ケータイに反映された写メをズイツと拓海の方へ向ける。

一瞬で、拓海はその画像に魅入った。

「……欲しいもの、発見。」

そうポソリと呟くと……

「……篠原も早く仕事しろ。」

パチンとケータイを閉じ恵美に返すと、恵美を仕事に託した。

「はいはい。早瀬君、欲求もほどほどにね？」

「……欲しいものを欲しいと感じることの何が悪い？」

恵美はにんまり笑うと

「だって早瀬君、性質悪いもん。」

見透かしたような瞳で、そう断言した。

拓海は、「どうだかね。」とフツと余裕みを帯びた笑顔で答える。

「……内心、「よく分かってんじゃん。」と恵美の透視力に観念していたが。」

それから、例の方法によって美輝の有無を聞かずに、半ば無理矢理付き合い始めた。

「……恵美は……飄々とした美輝の性格に、安心しきっていた。裏で悩んでるなんて……気づかなかつたのだ。」

+ - + - + - + - + -

「ただいまあつ！」

美輝は、重い扉をバンツと開けて威勢の良い声で「ただいま」を言った。

その明るい声が中央ホール全体の隅々まで響き、余韻を数秒残す。

「……つせえなあ美輝。鼓膜破れるっつの。」

風呂上りなのか……大輝は、バスタオルで髪をガシガシ掻きながらホールを横切る。

「へへへ〜ゴメンツ！元氣ありあまつてるう〜って感じ?？」

笑いながらそう言い、美輝は靴を脱いだ。

「・・・あ、そうだ。レポートやってくんない?」

思いついたかのようにそう言う大輝に対し、美輝は「ハア?」と顔を顰<sup>しか</sup>めた。

「アンタ1日中何やってたの?」

「昼寝。」

フツと微笑み、手にしていたスポーツ飲料をクイツと一口飲む。何食わぬ表情の大輝の態度に、美輝は益々顔を顰める。

「流石B型人間・・・よくずっと寝てられるねえ。」

『テメエのせいだよ』と、声に出来ない反論を心の中でした大輝は、反論する代わりに少し眉を顰めて、またスポーツ飲料を喉に注ぎ込んだ。

・・・美輝がいない間、ずっと起きていると・・・心の拠所<sup>ココロ</sup>がない、喪失感に蝕まれるから、夢の世界で少しでもそれを感じないようにと 逃げていたのである。

「まあ、私が書いたら字がキレイすぎてかえって不気味だから遠慮しとくよ 大輝って字イ汚いもんねえ。」

「・・・るせえよ・・・悪かったな。字イ汚くて。」

珍しく、拗ねたような口調でそう言う大輝が、なんだか可笑しく思

えて・・・美輝は思い切り笑った。

『やっぱり弟扱いされてる』という、弟・・・即ち家族・・・いや二  
従兄妹という繋がりに苛つき・・・

でも、二従兄妹という関係があつてこそ、出逢えた運命を誇らしく  
思え・・・

大輝の中で、二従兄妹という言葉は、家族としか・・・弟としか見  
られないことに『苛つき』の感情を覚え、逆にこの二従兄妹という  
関係があつたからこそ、何分か・・・恐らく1兆は超えるであろう  
分母の1の確率で出逢えた奇跡に、『感謝』して・・・  
苛つくのに、感謝する。

俗に言う、“矛盾”だ。

『・・・あれ？私、作り笑いしていない。心から笑えている。』

拗ねた大輝の表情を見て、少女はふとそんな単純なことに気づいた。  
でもそれは、「確信」へと徐々に結びついてゆく。

大輝の隣が、私の心の拠所かもしれない。自然に笑えるほど、  
心が落ち着く場所・・・

やがてその場所が、“恋人”という場所に妥当することは・・・美  
輝は、まだこの時気づいていなかった。

矛盾した気持ちに悩む少年。

無理矢理好きでもない男と付き合わされた少女。

それぞれが辿ってきている、ひとつのグラフ。

それは、互いが、互いの存在を「心の拠所」と素直に交わした時・・・

・初めて、格子点が生まれるグラフだった。  
・・・だが、交互とも伝え合う気はなかった。

それは・・・相手が自分のことをどう思っているのか。それが不安だからなのだろう。

要するに、互いが互いを「ただの二従兄妹」と思い込んでいる。

それが思い込みだと知らない2人のグラフは・・・時を重ねるにつれ、どんどん離れてゆく。

伝える術も瞬間も・・・その2つのグラフの離間に飲み込まれてしまい、姿を眩ませて・・・けど、「心の拠所」と思える気持ちは、比例も反比例もせず・・・強い意味を持ったまま、2人それぞれの中に留まっているままなのだ。

### 第3話〜心の拠所〜（後書き）

『比例×反比例』裏コント〜学校では？』

作者「え〜。更新遅れてすみません&短くてすみません・・・」

拓海「つたく。こんなダメ作者ですみませんねえ。俺のよさも引き出してねえし。」

作者「・・・（どんだけナルシなんだよ。）今日は早瀬拓海に登場していただきました。早速インタビュー。」

拓海「さつさとインタビューしろよ。バイト遅れる。早く美輝に会いてえし。」

作者「・・・（彼女バカ？）学校ではどんな感じ？」

拓海「朝、靴箱に入ってる・・・毎日少なくとも10通以上は入っている手紙（俗に言うラブレター）を適当に回収するトコから始める。午前中、女どもから調理実習で作った菓子センゴウを先公の目の隙を狙って食う。まあ女教師の場合は許してもらえから堂々食えるけど。午後中は眠いから適当に拾った女と屋上で寝る。まあ美輝以外の女見てねえから疚ヤマしいことはしてねえけどな。部活中はとことんサボる。帰宅したら、風呂入って女からのメールチェックして適当に返信して・・・云々。」

作者「・・・浮気しまくりじゃんか。美輝カワイソ。」

拓海「は？美輝以外の女なんか見えてねえぞ？何言ってるんだよ読解能力ナシ作者。」

作者「・・・（怒）」

拓海はとことんヤツ・・・という設定です

#### 第四話〜欲情〜（前書き）

〜あらすじ〜

お互いがお互いを「心の拠所」と思っているが、伝えられない今日この頃。

美輝は、好きでもない彼氏、拓海とカラオケに行く約束をしてしま  
い……？

## 第四話　欲情

時は順調に流れて行き・・・1カ月ほどが過ぎようとした、梅雨の時期。

美輝の部屋は湿気が（他の部屋に比べ）溜まりやすく、加湿器が設置されてあるダイニング・・・つまりはダイナールームで、大輝が朝食を黙々と食べている傍で湿気に強いタイプのファンデーションやらを念入りにつけていた。

「あ、今日拓海とカラオケ行くから夕飯自分で食べてよね？」

思いついたような声で、美輝は鏡を見つめたままそう言う。

「・・・拓海？」

自分が知らない男の名前をサラリと言った美輝に対し、大輝は朝食から手を離して真横下にいる美輝を見た・・・というか半ば睨んだ。

「あ、そうだった。大輝には言っていなかったんだっけ・・・早瀬拓海。バイト先の・・・彼氏だよ。」

何食わぬ表情を装い、美輝は鏡を見て化粧を進める美輝。

鏡に映ってる自分の顔は・・・今にも泣きそうなほど歪んで、酷く醜い。

そんな鏡に反映されている醜い顔は、大輝の視線の死角にあり、大輝は美輝の状態に気づかず・・・1カ月前ぐらいのことを思い出す。

偶然部屋で見つけた、1枚の写真。美輝と知らないヤツの笑顔。

その“知らないヤツ”が、例の拓海だということを、大輝は何とな

く察知できた。

「・・・へえ。美輝でも彼女できるんだ？」

「なっ！彼女って何ですかっ！？どういう意味っ！？私が男とでもおっ！？」

「こんな威勢のいいヤツ女じゃねえ。」

大輝はフツと笑いながら嫌味を吐き捨てるように言い、また朝食に手をつける。

・・・手に持っている箸は 震えていた。

離れるのかな・・・

そんな想いさえ大輝の頭の中で、素直に鮮やかに浮き出てくる。

嘘だ。何思ってた・・・と大輝は否定したいところだったが

現実是不変ならない。

「もっ、ちっちゃい頃はこんな嫌味つたらしい男じゃなかったのに・・・もっと可愛かったのに・・・」

美輝は溜息混じりでそう告げ、アイシャドウをパタンと閉じた。

「行ってくるね。」と、また黙々と朝食を口に行っている少年に言い、美輝は怒ったような足取りで玄関を出た。

「・・・所詮・・・年下扱いだよ。」

溜息混じりでそう言った言葉は・・・美輝の耳に、行き届かなかった。

二従兄妹という壁があって、なかなか伝えられないこの想い。

彼氏の存在がなかったら、伝えていたのだろうか？  
それとも・・・二従兄妹でなければ、とっくに伝えられていたのだろうか？

伝えることは、簡単ではない。

・・・そんなことを考えながら、大輝の朝の時間は刻々と過ぎていった。

空は・・・大輝の心境を表すかのような、灰色。その空は、泣いていた。

+ - + - + - + - + -

「雨だねえ〜」

頬杖をついていた恵夢が、ふと気がついたように美輝にそう言う。  
美輝は相槌を打った後、髪を掻き揚げて溜息を吐いた。

「どうしたの美輝？テンション低いよお〜？」

「え？あ・・・雨で髪の設定崩れちゃうからブルーって感じ？」

ハハツと美輝は笑いながらそう言った。

美輝は、髪を掻き揚げるような仕草をする子じゃあない。・・・と  
いうことを熟知していた恵夢は多少疑心を覚えつつも、根掘り葉掘り聞かず、黙りこくった。

一方、美輝は放課後のことについて幾度も幾度も心中で溜息を吐いていた。

・・・拓海カラオケに行く、などという約束をってしまったのは・・・  
一昨日のバイトの場であった。

・・・

「美輝、明後日カラオケ行かね？」

仕事を終えた拓海は、笑顔でそう誘う。

・・・その笑顔は、まるで「従え」とでも言いたそうで・・・それを察知した美輝は、少々怯えたように眉を顰めて

「・・・いいよ。」

承諾をしてしまった。

「じゃ、明後日校門で待ってる。」と拓海はそう告げると、マスターームに足を進めた。

この他愛もない約束の裏には、拓海の恐ろしい「男」の欲情がある、ということに気づきもしない美輝は、着替えのためにスタッフコスチュームのボタンに手をかけた。

その手は・・・震えていた。

・・・

嫌な時間!! 早く来る・・・という誰がつくったか分からない等式。それは本当に存在するんだな・・・と、校門で影を薄くして立つっている美輝は改めて思った。

美輝の傘に降り注ぐ細い線。

「・・・私にだけ、雨降ってるみたい・・・」

自嘲的に言った時。ひとつの黒いシツクな傘が、美輝のところへと吸い寄せられるようにやって来た。

+ - + - + - + - + -

室内用グラウンドがある神楽家は、外の雨なんか関係せず、いつだってサッカーができる。

大輝は、コンピュータから取り寄せた白黒の電子人間と一緒にサッカーをしていた。

何人もの電子人間をスルスルと風のように抜き、足についているように扱ったボールは、ゴール付近になると吸い寄せられるように鋭い音を立ててゴールに入り、笛が鳴る。

「・・・つまんね。」

電子人間とのサッカーに厭きを覚えた大輝は、ゲーム中止ボタンを押す。

途端、それまで騒がしく動いていた電子人間はフツと姿を消した。

大輝は額に浮き出る微量の汗を拭い、自室へと足を進めた。

自室に着き、大輝はその大きい体をベッドにボスツと預ける。そしてそつと、瞳を閉じた。

瞼の裏に映るのは・・・美輝と“アイツ”が並んでいる姿。

「・・・ムカつく。」

アイツに・・・そして想いさえ伝えられない“自分”にムカついた大輝は、瞳を開けて胡坐をかいた。途端、ケータイの着信音が部屋中に鳴り響き渡った。

「・・・篠原？」

ディスプレイに反映された「篠原恵夢」の文字を不審に思ったが、相手は電話をかけている。しかも美輝の親友だ。待たす訳にもいれない。

大輝はたどたどしく、通話開始ボタンを押した。

「もしもし？」

『あ、大輝君？恵夢だけど。』

分かってるし、と心中でツツコみながら、大輝は次の言葉を待つ。

『美輝さ、朝から様子変なんだよね・・・心当たりとかある？』

「・・・心当たり？」

美輝がへこみそうな事件は・・・大輝には、目星さえつかなかった。

「別じゃないけど。」

『そっかあ。なんか帰りはさっさと帰っちゃうし・・・帰ってきたらちよつと探ってくんないかなあ？』

「・・・根掘り葉掘り聞く性分でもな・・・」

“帰ってきたら・・・”

その言葉が、妙に渦巻き、それと同時に、朝の美輝が告げた言葉を思い出す。

「学校の近くのカラオケ屋ってどこか知ってるか？」

『は？カラオケ？近くだと・・・レックスカリイかなあ？』

「ありがとう。じゃ。」

手短にお礼を済ませ、大輝はケータイの通話終了ボタンを押し、ベッドに預けていた体を起こした。

+ - + - + - + - + -

「ここだよ。もう部屋は予約している。」

美輝は、レトロ風のアレンジされた看板を見上げた。

そこには大きく『と、キリル文字で表記されている文字があつた。』

いつもと変わらないその文字に・・・美輝は小さく溜息を吐く。

「行こっか。」

拓海は、美輝の手をギュツと握った。

美輝はどきまぎしながら「うん。」と答え、拓海についていった。

美輝は、何度も恵夢とカラオケに行ったことがある。

とくにこの『は、行きつけのカラオケ屋だった。』

何度も目にする、レトロ風のホール、それを真ん中にしてついている6つぐらいのボックス。

今、それは・・・美輝の目には、酷く色褪せて見えたのだった。

「早瀬様ですね？3番館になります。」

店員は、拓海にデンモク（カラオケリクエストコマンダー）とジユ

「スやらの注文表を渡した。」

拓海は店員に一礼すると、美輝を連れ、3番館のドアを開けた。

中には、またまたレトロ風なものばかり。

スクリーンにソファ、テーブル、マイクまでレトロ風にアレンジされたものばかり。

そんなものが、美輝は好きだったが　　今では、何も好きになれない。

「何歌う？」

美輝の心境も知らない拓海は、デンモクを美輝に渡した。

「えつとお・・・」と迷う素振りを見せる美輝だが・・・拓海と歌う曲なんて、どうでもよかった。

「美輝、mihimaru G T好きだったよね？」

拓海は、美輝の好きなアーティストをピタリと当てる。

そんなところに美輝は不気味な気持ちを持ったが・・・所詮それは事実。うん、と肯定した。

「じゃあ、『I SHOULD BE SO LUCKY』歌うか？」

デンモクが、その英文字を順番に反映させ・・・検索結果、1つの項目が出てきた。

美輝は小さく頷き、それと同時にその曲が転送される。

そして拓海は、“カラオケ雰囲気作り”のために部屋の電気を消した。

好きだったはずの・・・結構上げ調子のメロディが・・・  
今の美輝には　とても哀しく聞こえた。

『I SHOURD BE SO LUCKY』は、ヒップホップ  
で速度も結構高め。

だけど、美輝はそんな速度もスラスラこなす。

間奏・・・正しくは美輝が歌わない場面で、美輝はあることを思っ  
た。

大輝、ちゃんとレンジ使えてるかな？

大輝は、自他共に認める家電音痴。昔、洗濯機を爆発させた失態を  
残している。

「愛されて Lucky Lucky Lucky Lucky  
愛しましょ Lucky in Love  
愛知れば Lucky Lucky Lucky Lucky  
愛あれば Lucky in Love」

歌詞の一部分を歌った時・・・美輝はとても切ない気持ちになった。

愛されて・・・幸運(Lucky)じゃないよ・・・

そんな美輝の気持ちとは裏腹に・・・曲はどんどん流れていった。

5曲目あたりだろうか。それさえ分からない。

美輝は無心放心にデンモクを弄っていた。

「美輝、最近学校どう?」

近くで、歌い終えた拓海の声がする。

美輝は適当にかわずと、mihimaruGTの曲を黙々と探していた。

「・・・美輝。」

少し怒ったように拓海はそう言う。

いつもと違う声調に驚いた美輝は、傍にいる拓海を見上げた。

その時・・・

「んっ・・・!?!」

唇に、凄い力のものが押し掛かる。

やがてその力・・・圧力に耐え切れなくなった美輝は、力を受けながらソファに倒れこんだ。

その圧源が拓海の唇・・・ということに気づくには、何秒ぐらいかかったことだろう。

酸素を求めて、少しだけ開いた美輝の口に・・・半ば強引に拓海の舌が割り入ってきた。

「ふぁ・・・あ・・・」

自分でも分からない声が、美輝の口から出る。

そんな声をもっと出したいかのように、拓海は美輝の舌に自分の舌を絡めさせる。

人間は、舌がないと上手く話せないものである。

やはり美輝の口からは、意思外れの声が出るばかりであった。

数分侵食が続いた後、拓海は漸く美輝の舌を解放した。  
美輝は目を開いて上にいる拓海を見上げる。

そんな美輝に対し、拓海は下にいる美輝を見下ろし

「・・・俺だけを見るよ・・・」

今までにない、不安そうな声と表情。

そんな拓海の様子に、トクンと胸が高鳴った美輝だったが・・・それも束の間だった。

「・・・ひゃっ!？」

見下ろしていたはずの拓海が、美輝の上に抱き締めるように倒れこんだ。

美輝の背中の下に手を滑り込ませ、さらに紺色のブレザー、白のシヤツの中に手を滑り込ませて・・・ひとつの金具を、慣れた手つきでプチッと外した。

さすがにここまでされると、これからされることに目星がついた美輝は・・・

「や、やめ、てよ拓海っ!」

噛みまくりの反抗をした。

ただど拓海は、そんな反抗に耳さえ向けず・・・もう片方の手で、シヤツのボタンを順に外していった。

美輝がその手を制御させようとも・・・まったく効果はない。

シャツのボタンは全部外れ、美輝の白い鎖骨が露になっていた。拓海は、それに唇を這わす。

「やっ……ん」

鎖骨に初めて感じる感触に、美輝の体は一瞬跳ねる。

やがて、這っていた唇は外れ……。鎖骨にキスしていた合間に……。美輝が知らない合間に露にさせておいた白い胸を、拓海が鷲掴みにした。

「やあっ……」

その力の痛みに、顔を歪ませた美輝だが……。やがて、手の力は抜いて弱い力で優しく、拓海の手の中でそれは撓む<sup>たぐ</sup>。

ああ、今自分はなんてことしているのだろう……

自分でも分からない現状に立ち向かっている合間にも……。美輝の頭の中に映るのは、1人の少年だった。

“モテすぎたから”というなんともムカつく理由で通信教育にした少年。

家電音痴で洗濯機ぶっ壊した張本人。

悪戯っぽい笑顔が素敵な、“大輝”。

何故大輝の名前や顔が、よりによってこんな時にだけ頭の中に浮かんできたのかは……。美輝にはまだ、分からなかった。

#### 第四話〜欲情〜（後書き）

『比例×反比例』裏コント〜mihimaruGTって?〜

恵夢「ところでさ、作中に出てきたmihimaruGTって誰?」

作者「・・・(コイツ、絶対大事なトコ見てねえな・・・)hironokoとmiyakeが結成したユニット。代表作・・・というかいちばん有名なのが、「気分上々」の、私が好きなアーティストだよ。」

恵夢「へ〜え。あ〜!あのhironokoちゃんがあっ!声カワイイよね」

作者「そうそう。私の中でいちばんお気に入りなのがこの作中の曲・・・『I SHOULD BE SO LUCKY』なんだよ。」

恵夢「アンタのお気に入りなんてどうでもいい」

作者「・・・」

恵夢はサラッと毒舌キャラです。  
小説の方ですが、拓海と美輝、これ以上行為させませんからご安心くださいm) (m

## 第5話〜片想いの独り善がり〜（前書き）

〜あらすじ〜

拓海に連れられ、カラオケにやってきた美輝。

まるで別の場所に来た感覚がする美輝は、ただただ気分が落ち込んでいた。

そんな美輝の状態に嫌気が差した拓海は、とんでもない行動に移る。そんな行動に泣きそうになった美輝が想うのは・・・？  
そんな中、一筋の光が差した。

## 第5話 片想いの独り善がり

頭の中に映る、大輝の姿を見つめつつも・・・今されていることに向き合おうと決めた美輝は、思い切り拓海を殴ろうとするが・・・手が押さえつけられ、その案を許さない。

ああ。好きでもない人と最後までいくのかあ・・・

そんな絶望すら、美輝の中に浮かんできた頃・・・

「・・・そーゆーの、ラブホとかでやってくんない？」

ガチャツと、鍵の開く音がし、同時に聞き慣れた声が来た。

「悪いけど、ここカラオケなんで。やる場所じゃねえんだよ。」

途轍もなく低く、恐ろしい声の主は、拓海の手首を押し折るように曲げる。

拓海はその手首の痛みに、一瞬顔を歪めさせたが・・・

「・・・不法侵入って立派な犯罪だし？」

「不法じゃねーし。店員に合鍵もらった。」

相手は、鍵を自慢げに拓海につきつける。

「・・・くっ。」

拓海は、観念したかのように・・・変な呻き声を上げた。

「行くぞ美輝。こんなヤツと一緒にいちや腐る。」  
「え……?」

美輝は、肌蹴た胸元を服で覆いながら呆気ない声を出した。

そんな美輝の姿や声お構いなしに、彼は美輝の細い手首を掴む。

胡坐をかいてムスツとしている拓海を放置し……美輝と彼は、3番館を後にした。

美輝がたどたどしい足取りで一生懸命彼に着いていこうとしている時。拓海はフツと笑い、髪を掻き揚げた。

「……二従兄妹……ねえ。血筋薄いから……結婚もアリじゃね?」

それは、自嘲気味の言葉でもあった。

さつき自分がした行為は……無論、美輝にとっては恐いことであった。

そういうことを熟知している自分がいたが……いてもたってもいられず、美輝に襲い掛かった。

……自分だけを見てくれる……という淡い期待を抱いて。

襲い掛かることは、前々から冗談半分で計画していたが……こんなにも切ない気持ちになるのは、想定外なことだった。

でも、現実には過去と変わらなかった。

美輝は、彼に着いていった。彼に反論さえしなかった。

「美輝の目には一体……誰が映ってるんだろうな。」

彼氏の自分か？ただの二従兄妹の同居人か？

二従兄妹という名の、想い人なのか？

それは拓海にさえ・・・分らなかった。

画面には、EXILEの『Pure』が、無の歌声を無視して流れていた。

僕等は 今を越えて 未来へと向かってく

10年後 何をしてるだろう

諦めた 過去も 場所も きつとそこに 君がいて  
辿るべき道を 歩いていると 信じてる

画面に反映される、この歌詞。

「美輝の正しい道って・・・何なんだろうな。」

想ってない相手・・・自分と付き合い合うことなのだろうか？

二従兄妹のアイツと愛し合うことなのだろうか？

「・・・いい加減、美輝の幸せを願えばいいじゃないか。」

拓海は、自分で客観的意見をポソリと呟くと・・・また髪を掻き揚げた。

想うだけの“片想い”なんだな。

無理矢理付き合っても、自分を見てくれない悲しさ。

好きになってくれない虚しさ。

他のヤツについていった現実。

それらが皆……」「片想いの独り善がりだ。」と嘲笑っているように。

……と、その時。完全に姿を忘れていた携帯電話が鳴り響いていた。

ディスプレイには、『篠原恵美』と反映されている。

「……もしもし？」

『店長っ！なんで仕事サボるワケっ！？社長っ面しててサボるなんて持っつての他！学校に通報するよっ！？』

恵美の珍しい奇声に耳を塞ぎつつも、「ああ、そういうのもあったっけ。」と、少年は非常に落ち着いた気持ちで聞いていた。

「ああ。ゴメンゴメン。」

『もっつ……何してるワケ？』

恵美の問いかけに、拓海はフツと笑って

「ん……カラオケ？」

バカ正直にそう答えた。

この後、恵美からの益々高い奇声を受けたのは言うまでもない……

拓海は、お金を払ってカラオケ屋を出た。

「……雨、止んでねえな……」

独り善がりな、雨。

自分さえ降れば、他はどうでもいいって思ってる。

・・・その独り善がりには、畑には恵みを与え、人間には、不快さを与える。

そんな雨が止むと・・・自分は、どうなるだろう。

畑は、次第に干乾び、人間には晴れた気持ちか蘇る。

まるで・・・畑が俺で、その人間が美輝で、雨が・・・俺の気持ちなんだろうな。

拓海は、どうしても・・・干乾びるのが嫌だ、と思った。  
想いが枯れて・・・美輝への想いが。

でも・・・自分の想いが枯れるのが、美輝の願いかもしれない。  
でも、自分は、自分自身の想いが枯れるのが、嫌だった。

美輝の幸せを願うか、自分の我侭を取るか。

2つの選択肢の狭間で、拓海は悶々と悩んでいた。

・・・それでも雨は、嘲笑うように降り続ける。

## 第5話〜片想いの独り善がり〜（後書き）

『比例×反比例』裏コント〜恵夢って!??』

作者「・・・前回、あなたの妹の恵夢ちゃんに散々苛められましたよ・・・」

恵美「うそっ!? 本当!? すみません・・・あのコさらつと毒舌で・・・」

作者「（あ、やっぱり恵美はキャラ違うなあ）いや、それは設定で決めてたんで・・・では、いきなりですが、恵夢ちゃんの失敗談とかあつたりする?」

恵美「恵夢の? 失敗談?・・・中2の時、おねしょしたんだよねえ。」

作者「・・・（笑いを堪えている）じゃ、他には?」

恵美「期末テストで、最下位で・・・晩ご飯抜きになったり・・・作者「プククツ・・・じゃ、他には?」

恵美「ラブレター靴箱に入れようとしたら、別の人の靴箱に入れてしまった!」

作者「ええ〜っ!? マジでえっ!? スゴオツ! どんだけえ〜っ!?」

恵夢「サークラーアーキー・・・」

・・・この後、恵夢にこてんぱんにさせられました（^^;）

恵夢にも可愛い（?）過去があつたんですね（笑）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1247e/>

---

比例×反比例～格子点～

2010年12月13日21時43分発行